

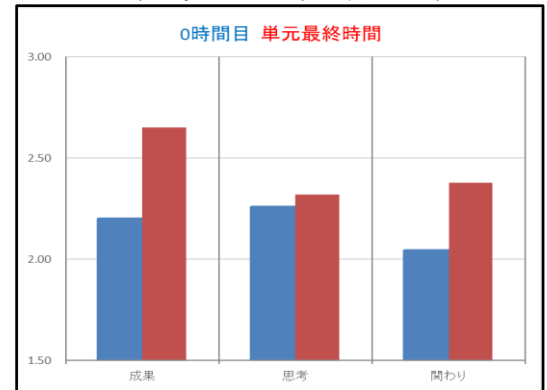
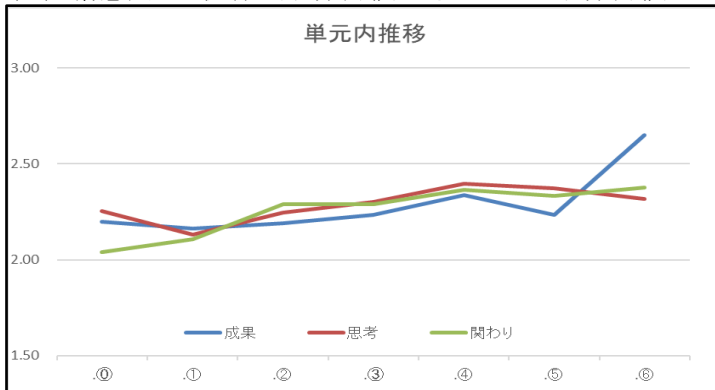
1 単元名 ホップ、ひねって、着地！ ～ロンダート～

(器械運動・マット運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から)

男子18名 女子14名 計32名



- ・「成果」は、単元前と比べて数値の上昇が目立ち、3つの項目の中で一番伸びがあった。単元全体を通して、児童がそれぞれ自分に合った目指す姿を設定でき、そこに向かって努力し続けることができたからではないかと考えられる。課題ごとに目指す姿や練習の場、練習する際に意識するポイントが書かれたレベルアップ表を示したことで、自分の姿の把握につながり、正しく練習の場を選択できたからではないかと考える。
- ・「思考」は、単元の終わりに向けて緩やかに伸びが見られた。はじめは、体慣らしの方法や練習の場の把握などに重点を置いたため、数値が低かったと考えられるが、思考を働かせる学習に重点を置いた単元中盤から後半にかけては数値が上がっている。課題に向けて取り組む中で、自分に合った場を選んだり選び直したりする活動に、意欲的に取り組むことができたことがうかがえる。
- ・「関わり」は、単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。単元中盤から、課題が同じ友達同士で見合いながら学習したことが要因の一つとして挙げられる。友達からアドバイスをもらったり、友達と自分の姿を比較したりすることで、より目指す姿に近付くことができるということを実感できたと考えられる。指導計画の前半から、積極的に関わり合えるように支援していきたい。

(2) 技能面

	①かえるの足打ち (腕で体を支え、腰を高く上げることができる)			②川跳び (腕で体を支え、腰を高く上げることができる)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	18	8	6	17	7	8
単元後	25	4	3	23	6	3

	③壁倒立 (倒立姿勢で体を維持できる) (目線はマット)			④側方倒立回転 (開脚倒立の姿勢ができています)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	19	5	8	10	10	12
単元後	24	3	5	13	13	6

	⑤ロンダート (ホップによる強い足の蹴り (手の突き放して体が浮く))		
	できる	もう少し	できない
単元前	5	11	16
単元後	7	12	13

- ・単元前と比較して、数値の上昇が見られる。側方倒立回転やロンダートにつながる体慣らしの運動を、継続的に行うことが技能向上にもつながったのではないかと考える。また、「手でしっかり体を支えることを意識する」「腰を高く上げることが意識する」などのように、その日の学習で意識してほしいポイントを授業始めに提示してから取り組んだことで、体の部位などに注目しながら丁寧に運動できたことも

技能向上の一要因として考えられる。

- ・ロンダートは、前学年でも取り組んだ技であったが、単元終わりまでにできた児童は10人未満であった。突き放しや足をそろえることなど、ロンダートの習得まであともう少しの児童が大半だが、壁倒立など逆さになる感覚を掴めずに終わってしまった児童もいる。逆さになることへの恐怖心を軽減する手立てや場を準備し、「できた」という達成感を少しでも味わえるように工夫していきたい。

(3) 思考面

問 ロンダートができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか（しましたか）。（複数可）			
単元前		単元後	
・壁倒立(倒立姿勢)の練習	14	・壁倒立(倒立姿勢)(足を真上に上げる)の練習	19
・側方倒立回転の練習	11	・マットを強く、早く突き放す練習	9
・マットを強く押す練習(突き放し)	10	・赤台を使って突き放す練習や体をひねって両足を揃える練習	7
・ホップの練習	8	・壁やマットで、倒立姿勢からあおる練習	5
・かえる跳びや川跳びで腰を高く上げる練習	7	・ホップ側方倒立回転の練習	5
・手足を伸ばす練習	4	・障害物をマットに置き、遠くに着手する練習	4
・お手本となる人の姿や自分の動画を見比べる	4	・大きくホップステップホップをする練習	2
・体をひねる練習	3	・川跳びで腰を高く上げる練習	2
・両足で着地する練習	3	・友達と見合ってアドバイスをした	2
・足を振り上げる練習	2	・ポイントを絞って繰り返し練習した	1
・自分の苦手な部分を何度も繰り返し練習する	2	・苦手だと思ったことを見付けて、改善するための最も適切な場を選んで取り組んだ	1
・手を着く場所の練習	1		
・マットを見る目線の意識	1		

- ・単元前よりも、「この場でこのような練習をした」というように、具体的な取り組みを書く児童が多く、自分の課題に応じて必要な運動をすることができていたことがうかがえる。中でも、壁倒立についての記述が多く、ロンダートという技は、足を真上でそろえる倒立姿勢ができるようになることが重要であることを、多くの児童が理解したと考えられる。
- ・「友達と見合ってアドバイスをした」「ポイントを絞って繰り返し練習した」「苦手だと思ったことを見付けて、改善するための最も適切な場を選んで取り組んだ」といった「学び方」に関する記述が見られた。友達と関わり合う中で、自分の目指す姿に向かって取り組み、改善するという学習のサイクルができていたことがうかがえる。今後は、よりよい学び方をしている児童やグループの様子を紹介することで、様々な課題解決の方法があることを広め、学級全体で高め合う雰囲気を作り出していきたい。

3 成果と課題

高学年のめざす姿

課題に対しての自分の考えをもったり、仲間と試行錯誤したりするとともに、解決する場や方法を伝え合う児童

【成果】

- ・課題と練習方法や場を関連付けて提示することで、自分の目指す姿に向かって場を選んだり選び直したりしながら取り組むことができたのではないかと考える（レベルアップ表）。また、ホワイトボード上で名前カードを移動できるようにしたことも、児童が主体的に学習するための手立てとなった。友達同士で、「〇〇さんは、ここの練習場がいいと思う」などに関わりの一助にもなった。
- ・ロンダートと側方倒立回転の違いについて考える活動を、異質のグループで取り組んだことで、下位の児童にとっては上位の児童の姿から2つの技の違いを発見することができたり、どうすればロンダートができるようになるのかアドバイスをもらって技能の向上につながったりしていた。また、上位の児童にとっても、自分の体の部位の使い方を振り返るよい機会となり、「このような体の使い方を、このタイミングですれば技ができる」と下位の児童へ具体的なアドバイスができるような姿につながっていた。今後も学習のねらいに合わせて異質・等質を変えながら取り組んでいきたい。

【課題】

- ・低位の中でもさらに細かく実力が分かれていたため、一人一人の能力に合わせて技に挑戦できるよう、よりスモールステップの場を充実させる必要があると感じた。
- ・児童同士のアドバイスの仕方は、単元はじめと比べると上手になったが、より具体的で的確なアドバイスができるよう、評価板に具体例や会話の型を示したり、教師の声掛けから意識できるようにしたりしていきたい。